

主 題：明らかにされる信仰の真価 ③

聖書箇所：コリント人への手紙第一 3章12-17節

Iコリント3：12をお開きください。パウロはコリント教会に教会が霊的に成長することの大切さを教え続けています。教会として、また個人として成長することによって、私たちは目で見ることのできない私たちの神を周りの人々に明らかにしていくという使命を果たすことになるからです。私たちは我々の神がどんなに素晴らしいお方であるかを世に証するために、人々の前に明らかに示すために救いにあずかり生かされている。我々はその使命を果たすために成長することが必要だとパウロは教えたのです。

B. 各人の歩み 働き 11-17節

私たちが成長していくためにどうしたらいいのかをパウロは教えてくれます。

1. 「正しい土台を据える」 11節

まず最初に彼が言ったことは、正しい土台を据えなければいけないということでした。Iコリント1：23でもパウロが教えてくれたように、パウロはもちろどこに行っても同じメッセージを語るのですが、コリントの町を訪問した時、彼は十字架につけられたイエス・キリストのメッセージを語ったのです。イエスが誰なのか、何をなされたのか——。そのメッセージを聞いた人々がイエス・キリストを信じて人生の最も大切な土台を据えたのです。

2. 「正しい材料で建てる」 12節

神の前に喜ばれる生活、神の前に価値ある生活を全うするためには、まずその土台をしっかりと据えなければならないということ。その土台がなければ、価値ある人生を生きることはできません。それを教えた上で、パウロはきょう私たちが見ていく12節のところから、ではどんな素材を使って、どんな材料を使ってその家を建てるのかということに話を進めていくのです。

12節「もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら」と、その上に建てる建物の材料についてパウロは話を始めます。ここには2種類の材料が記されています。「金、銀、宝石」という価値のあるものと「木、草、わら」という価値のないものとが比べられているとお気づきになったと思います。この「金、銀、宝石」と列記されているのは、高価な順に並んでいるのかということ、決してそうではなく、それぞれ価値のあるものです。パウロは読者たちが価値あると思っている三つのもを挙げたにすぎないのです。同様にこの「木、草、わら」というのもコリント教会の人々が価値がないと考えていた三つのもを並べています。ですから、自分が金だとか、自分が宝石だとか、そういうものを探りなさいという話ではないのです。読者たちが考える価値のあるものとそうでないものとを二つに分けたのです。明らかにこの2種類の建物というのは、2種類の異なった人生、二つの異なった人生と言うことができます。高価な素材を使って造った建物はまさに神の前に価値ある人生を過ごした人の話です。価値のない素材を使った建物は神の前に価値のある人生を過ごさなかった人たち。パウロはそれを教えます。

1) 高価な素材を使った建物：神の前に価値ある人生を過ごした人

一体どんな人生が神の前に価値があり、どんな人生が神の前に価値がないのかです。価値ある人生というのは、主が喜んでいただくこと、また主に喜んでいただくことを念頭に置いてすべてのことを行っている人だと言えます。この人は自分のすべてのことを通して主に喜んでいただくことを願いながらすべてのことをしている人。神の栄光を語るだけではなくて、実際に神の栄光を現している人の話です。こんなリストが浮かんで来るとおもいます。この人というのは恐らく主のみことばを正しく学んで、その教えに服従しようとしている。正しく学ぶだけではなく、その教えに従っていこうとしているし、日々の生活においてみことばの教えを適用しながら生きている。人から嫌なことを言われるかもしれない。ではどのように応答することが神の前に喜ばれることなのか——。そういったみことばの適用を行いながら日々を歩んでいる。また間違いなくこの人というのは、自分の罪を憎むゆえに罪の告白をしながら生きる人です。神に喜ばれるためには罪から離れなければいけない。

また同時に、私たちはどんな時でも聖霊なる神様の助けを必要としているゆえに、聖霊なる神様のご支配をいつも求めている人。神様どうか私の思いも私のことばもその行いもすべてあなたが支配してくださるように。また信仰ゆえにどんな試練を経験したとしても、その中でも主に対して忠実に歩み続けようとしている人。また主が与えてくださったその霊的なたまものを用いて主と教会に熱心に仕えてい

る者たち。恐らくこういうリストは続くと思います。最後に一つだけ言えるのは、そのすべてのことを主への愛を動機として行っている人、神を愛するゆえにそれらのことを行っている人です。まさにそういう歩みは神の前に価値ある人生を生きている人だと言うことができますと思います。

2) 価値のない素材を使った建物：神の前に価値ある人生を過ごさなかった人

今度は価値のない人たちの話です。恐らくその人たちは主のみことばを学んだとしても自分勝手な解釈をするのです。神が言われていることを謙虚に素直に聞くのが我々の正しい姿勢です。でも自分に都合のよいように解釈しようとしたり、またみことばを聞くだけでその教えに従って生きようとしていない人。日常生活においてもみことばを適用して生きるのではなくて、自分の考えやこの世の人々の知恵、これまでの伝統等を重んじて、そっちを優先して生きようとする。何をするかに関心があり、それを自分の力で、また人からの評価を期待しながら行う人々。またそれを行う時に人からどんなふうと言われるか、人から褒められることを期待しながらすべてのことをしていると。

◎ 二者の比較

非常に重要だと思うので、もう少しこの二者を比べてみましょう。例えばみことばに対してどうかと言うと、神の前に喜ばれる人々はみことばを学ぶことを喜びとしてその教えに従おうとして主に助けを求め続けています。主よ、あなたがみことばを通して語られるその真理を正しく理解できるようにどうか助けてほしいと。そのような心の態度をもって神のみことばを学ぼうとしている人。喜ばれない人はどうかと言うと、みことばを聞いてはいるが、聞くことが目的であってそれに従おうとは思わない。聞いてもできるかできないかを自分で判断して、無理だと思うことは実践しようとしません。たとえ神が言われたとしても、最終的に決めるのは自分だと。

例えばきょう集まって来られた礼拝はどうでしょう？神に喜ばれる人々というのは週の初めの日曜日のこの時間に集まって来るだけではなく、私たちは礼拝者として生まれ変わったのです。ですから日々の生活においても心から主をあがめている人々。主に感謝をし、主を喜び、主をほめたたえながら主に従っていきこうとする。しかも、こうして共同の礼拝として週の初めの日に集まった時には、その主への感謝と喜びをもって、また聖い恐れを持って集ってきていると。礼拝というのは神への捧げ物です。その正しい思いを持って神を礼拝しようとして、日曜日だけではなくて日々の生活を過ごしている人。そうでない人は礼拝に来ることが目的になってしまっている。ですから、礼拝に来ることは来るのですが、その時間が速やかに経過することを願っていると。早く終わらないかなと。礼拝に集う目的も感謝を持って主をあがめることではなくて、その後の友人との時間を過ごすことが目的になっている。もしそれが目的として教会の礼拝に来ているのだったら、果たしてそれが神の前に喜ばれるのかどうかです。

宣教の働きはどうでしょう。喜ばれる人々というのは、出て行って福音を語りなさい、すべての「人々を弟子としなさい。」（マタイ28：19）という大命令に従うために主の助けをいただきながらキリストの福音を宣べ伝え、また兄弟たちの霊的成長に努めようとしている。救われてほしいという願いがあるから福音を語るし、救われている者同士が成長するように励まし合おうとし、助け合おうとしている。そうでない人は人の救いにも成長にも全く関心を示さない。

奉仕を考えた時に、喜ばれる人は奉仕も日々の生活も主への感謝の捧げ物として行っている。主が与えてくださった恵みに対して、感謝しようという思いが働きの動機になっている。この主への感謝や愛が動機であるためにすべてにおいて積極的に、また犠牲的に働いている人たち。そうでない人は、奉仕は義務感で行っているため、喜びも感謝もなくまた消極的であって、やめる口実をいつも考えていると。

最後に喜ばれる人々というのは、信仰者として模範を示している人たちです。イエス様がヨハネ13：15で「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したので」と言っています。イエス様は私たちがあなたたちに示したことは何か、それはあなたたちがそれを黙って行うように模範を示したと。当然私たちはそれにならって生きる責任があることは言うまでもありません。ですから、後から続いて来る者たちに模範を示す存在だということを知っている私たちは、私を見ないでイエス様を見なさいとは言わないのです。とても日本的ですが、残念ながら聖書的ではない。完全な人しか模範を示せないのだったら模範を示せる人なんて誰もいません。みんな不完全なのです。不完全ながら、その中でどのように神の前を正しく生きていこうとするかです。失敗することはしょっちゅうです。その時にどう正していくかです。そうして我々はこのように生きるのだという模範を示すのです。

テサロニケの教会はギリシャにおいて大きな模範を示していたと、パウロがⅠテサロニケ1：7で「こうして、あなたがたは、マケドニヤとアカヤとのすべての信者の模範になった」と言います。「マケドニヤとアカヤ」というのは今のギリシャ、もう少し広域ですが、大体そこを指しています。パウロもⅡテサロニケ

3 : 9で「私たちに権利がなかったからではなく、ただ私たちを見ならうようにと、身をもってあなたがたに模範を示すためでした。」と。パウロはテモテに対して「年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。」と、Iテモテ4 : 12で言っています。みことばは私たちに模範を示しなさいと教えます。

クリスチャン生活は消極的ではなくて、積極的な生き方です。もし積極的な生き方をするために、私たちがどんな気持ちを持つのかにフォーカスを当てなければいけないとするのであれば大きな間違いです。世の中は私たちがどういう思いを持つのか、ポジティブな考え方をすることが大切だと教えます。しかし、我々信仰者はそうではなくて、主に対する信頼が積極性をもたらすのです。どういうことか説明すると、神が言われるから私たちはできると信じるのです。私たちはこの全能の神様の御力を世に証するために救いにあずかり生かされているのです。ですから神ができると言われたことを疑うことなく、信じるのが大切なのです。もちろん神様の助けをいただきながら、全能なる神様のおことばに信頼を置くことです。人々が無理だと言っても、私たちの肉がだめだと言っても、神が言われたことを我々は信じるのです。なぜなら私たちの神はどんなことでもおできになるからです。自分の願い事かなうために熱心に信じるのではないのです。神が言われたことがそのようになると信じるのです。そのことを信じている人たちは消極的に生きようとしない。積極的です。皆さんは「あなたのみことばを疑う思いが私のうちから出てきます。神様、あなたのことばを聞いて、あなたのことばを疑う思いが出てきています。どうか助けてください」、「あなたのことばを疑うことなく信じて、行動する信仰を私に下さい」と、そんなふうに祈ります？私たちは私たちの弱さを神の前に持っていくことができるのです。もっと言えば、言わなくても神はあなたの弱さを知っているのです。そして感謝なことに、私たちに「いつでも来い」と、神の前に出て行く機会を神様は下さった。そんな特権にあずかっているながら、私たちはなぜ神様のところに出て行かないのかです。神のみことばに従うよりも自分の考えに従う、そういう失敗は聖書の中に数えられないほど出てきます。

◎ 良くない例

その中の一つを学ぶために是非皆さんと見ておきたいのは、申命記1 : 19からの話です。ここにあるのは神に従うよりも自分たちの判断に従った失敗例です。説明すると、モーセがイスラエルの民を率いてエジプトから出てきました。そして彼らは約束の地に向かって進み、カデシュ・バルネアまでやって来た時に、神がモーセを通して彼らに言います。「あなたがたは、私たちの神、主が私たちに与えようとされるエモリ人の山地に来た。見よ。あなたの神、主は、この地をあなたの手に渡されている。上れ。占領せよ。あなたの父祖の神、主があなたに告げられたとおりに。恐れてはならない。おののいてはならない。」(20-21節)と。私はそこをあなたたちに与えるからそこを攻めなさいと神は言われました。その時にイスラエルの民は十二部族からひとりずつ代表を出して、12名を言われている土地に送ってどんな土地なのか見てもらいましょうとスパイを送るのです。そして、彼らが戻ってきてどんなことを言っていたのかというと、申命記1 : 27-28で「あなたがたの天幕の中でつぶやいて言った、『主は私たちが憎んでおられるので、私たちがエジプトの地から連れ出してエモリ人の手に渡し、私たちが根絶やしにしようとしておられる。私たちはどこへ上って行くのか。私たちの身内の者たちは、「その民は私たちよりも大きくて背が高い。町々は大きく城壁は高く天にそびえている。しかも、そこでアナク人を見た。』』と。つまりスパイたちの報告を聞いたイスラエルは、自分たちの判断を優先して神の命令に逆らったのです。「無理、無理、絶対無理」、あんなところに行ってもみんな自分たちより体も大きいし、城壁もすごく高いし、そんな町々を私たちは滅ぼすことはできないと。

そして主が彼らのその不平の声を聞いた時に、34節「主は、あなたがたの不平を言う声を聞いて怒り、誓われた。35節に「この悪い世代のこれらの者のうちには、わたしが、あなたがたの先祖たちに与えると誓ったあの良い地を見る者は、ひとりもない。ただエフネの子カレブだけがそれを見ることができる。」、そしてこの後にヨシュアの話が出てきます。ふたりを除いてほかの者は誰一人としてあの約束の地に入ることはできない、彼らが神のことばを信じなかったからです。彼らは神のことばを信じるよりも自分たちの送った人間のことばを信じたのです。

そして神がお怒りになったことを聞いたイスラエルの民はどうしたかということ、攻めるのです。そして43-45節「私が、あなたがたにこう告げたのに、あなたがたは聞き従わず、主の命令に逆らい、不遜にも山地に登って行った。すると、その山地に住んでいたエモリ人が出て来て、あなたがたを迎え撃ち、蜂が追うようにあなたがたを追いかけ、あなたがたをセイルのホルマにまで追い散らした。あなたがたは帰って来て、主の前で泣いたが、主はあなたがたの声を聞き入れず、あなたがたに耳を傾けられなかった。」、大変悲惨なことがこのイスラエルに起こったのです。彼らは敗北したのです。イスラエルの民の問題は神の声に聞き従わなかったことです。神が言われたのにそれを信じなかった。しかも彼らは人間の判断に頼るのです。神ができると言ったのに、人間が無理だと言ったらその人間の声に耳を傾けてそれに従ったのです。こんな失敗を何度も繰り返してきた

し、我々も繰り返してきました。神が言われているのに信じ切れない。みことばは私たちに主のみことばに聞き従う大切さを繰り返し教えてくれます。神が言われたことを信じなさいと。自分自身が信仰的に弱いことに気づくのは当然です。なぜなら強い人っています？みんな弱いのです。失敗だらけです。ただここが大切なのです。自分の信仰の成長はこの弱さをどうするかにかかっているのです。弱いからできないとなるのか、それとも弱いけどできるとなるのかです。弱いからできないというのはまだ自分への過信を捨て切れていないのです。なぜなら弱いとわかっているなら、どうして神に助けを求めないのかです。神に助けを求めることがそれほどあなたにとって恥ずかしいことなのでしょう？悲しいことにあなたのプライドが自分でやらなければいけないとそれを許さないのです。弱さを認めていても、神に助けを求めない原因は神ではなくあなたのうちにあるのです。

2018年6月23日から7月10日まで、タイ北部のチェンライ県のタムルアン洞窟に12名のサッカー少年とコーチが閉じ込められた話。7月10日に彼らが無事に救出されたというニュースを我々はマスコミを通して何度も見ました。その中に当時14歳だったアドゥル・サモンという少年がいました。閉じ込められて約10日がたった時、忍耐も希望も肉体的なエネルギーも勇気も失いかげ始め、どうすることもできない状況で彼は祈ったのです。あなたは全能の神、聖く力に満ちておられるお方、今、私たちには何もできません。私たちをどうか守ってください。そして我々13人を助けてくださいと。このアドゥル・サモン君はこの中で唯一のクリスチャンだったのです。彼はこう言っています、「これらの恐ろしい状況を克服できたのは神への信仰だった」と。またこの状況に私と神とがともに立ち向かった。そして洞窟から脱出させてくださった、そのために助けてくださった神に私は感謝していると。困難を抱えている10代の子もたちへのメッセージとして彼は次のように言っています。「忍耐を持って神を信頼しなさい。祈りながら、希望を持って神の時を待ちなさい」と。彼は大切なことを教えてくれています。食べ物もほとんどなく10日間過ごすのです。このままここで死んでしまうとみんな覚悟したでしょう。でもその中のひとりがクリスチャンであり、この少年は神の前に祈り、神への信頼を学ぶのです。信頼したから彼らが助かったかどうか、それはわからない。でもこの時は、神は彼らを助けられたのです。そして彼自身がより確信を増したのは、神に信頼することは決して愚かではないということです。これは我々クリスチャンに与えられた特権なのです。なぜなら全知全能の神を信頼できるのです。この方とともに生きられるのです。この方が守り導いてくださる。だから私たちも救いにあずかった者として、神が喜ばれる歩みを神の助けによってなしていくことができるのです。ということは、神の前に価値ある人生を生きることはあなたにとっても私にとっても可能なのです。問題はどのように生きているかどうかです。

3. 人生に下る神の評価 13節

1) 「信仰生活が精算される時」が必ず訪れる

きょうのテキストに戻って、パウロは正しい土台の上にそれぞれがどう生きるのか、その建物を自分で建てるといふ話をしました。その上でこの13節から人生に下る神様の評価という話をします。13節「各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」、信仰生活が精算される時が必ず来るということです。あなたのクリスチャンとしての人生を神が精算する日が必ず来るのだと。「各人の働きは明瞭になります」、この「明瞭」ということばは「目に見える」、「明らかにする」、「明白な」という意味です。「なります」が未来形ですから、将来こういったことが起こるといふことです。つまりあなたの信仰生活が丸裸にされる時が必ず来るという話です。

2) 「信仰生活が精算される日」とは Iコリント1:11

ではその日はどんな日なのかというと、「その日がそれを明らかにするのです」、この「明らかにする」といふことばも「はっきりさせる」、「明白にする」という意味です。このことばは、今私たちが見ているIコリント1:11で、コリント教会の実情を「クロエの家の者から知らされ」たの「知らされ」と同じことばです。ですから、あなたの信仰生活の本当の姿が明らかになる時が必ず来るのだとパウロは言うのです。

13節に「というのは」という接続詞がついています。これは「なぜなら」という意味です。そしてこの後パウロはその日についての説明を加えていきます。「その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」と。この「現われ」といふのは「火」によって知られていないことを明らかにするとか、知られていないことを暴露するということです。それが「火」によってなされるということです。ですからその日が来ると「火」によってそれぞれの、あなたの知られていないことを、あなたの本当の姿を明らかにするのだと。大変恐ろしい日が来るということのパウロ自身が教えたのです。人をだますことはできても神をだますことはできない。この日が来た時に、我々が神の前に立ち、私たちの本当の姿が明らかにされる。

その話をした後、13節の終わりに「この火がその力で各人の働きの真価をためすからです」と、火の働きが記されています。火によって「ためすから」と書いてあります。この「ためす」というのは「試みる」とか「吟味する」ということです。金属の純度は見た限りではわかりません。本当に100%に近いのかどうかを知るためには溶かします。金属を溶解することによってその時に浮かんでくる不純物を見た時にその純度がわかるのです。同じことをパウロは言わんとするのは、「火」を使っているのです。そしてその「火」によって金属の純度がわかるように、「火」によってあなたの信仰の真価というものが明らかになる。そのことをパウロは告げるのです。あなたのクリスチャンとして生きてきたその生涯の価値が公正に神によって吟味される日が来るのです。

4. 評価の実際 14-17節 そのときに起こること

ではその日は一体どんな日なのかと思いますよね？それはキリストが再臨される時です。イエス様が戻って来られ、私たちを空中に引き上げてくださって、そこでイエス様にお会いするのです。まさに空中再臨の話です。私たちクリスチャンが着くのは“キリストのさばきの座”です。そこであなたが信仰者として行ったわざについての報いをいただくのです。神様から褒美をいただく所、それが“キリストのさばきの座”です。我々クリスチャンはその場に立って、あなたはこういう罪を犯してきた、だから永遠の滅びだと罪のさばきを受ける場所ではありません。なぜなら私たちの罪は赦されたのです。信仰者として神の前に立った時にこの“キリストのさばきの座”ではあなたがクリスチャンとして歩んできたその歩みの真価が明らかにされる。そして神様からの賞賛をいただく者、そうでない者が明らかにされていくのです。その時何が起こるのか、評価の実際がこの14-17節に出てきます。「もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」、審判者である神様によるさばきの話です。二つのさばきがあることをご存じだと思います。“キリストのさばきの座”なのか“大きな白い御座のさばき”なのかです。黙示録20章に出てくる“大きな白い御座のさばき”というのは、イエス様の救いを拒み続けた者たちに対するさばきです。今我々が見ているのはクリスチャンたちに対するさばきのことです。

1) 価値ある人生を送った信仰者：焼けずに残る建物 14節

14節には「だれかの建てた建物が残れば」とあります。彼が言っていることは、火によって焼かれてしまうのです。火によって焼かれたとしてもその建物が残れば、その人はその残った物に対しての報いをいただくのだと。この箇所を直訳すると、「もし・ある・建てた・働きの残れば・報いを受けることとなります」となります。ですからここで言っていることは、火によってある物は焼かれてなくなってしまし、ある物は残るという話です。どちらかです。この「建てた建物が残」っている、ここで言わんとしていることは、価値ある人生を送った信仰者の話です。火によってまだ建物が残る、つまり神の前を正しく歩み価値ある人生を生きただけです。

2) むだな人生を送った信仰者：焼ける建物 15節

ところが15節に出ているのは、火によって建物が焼けた時にすべてがなくなってしまうのです。つまりむだな人生を送った信仰者の話です。ただ「その人は損害を受けますが」、つまり褒美をもらうことができたのに、それをもらえないのです。「損害を受け」というのはそういうことです。でも「自分自身は、火の中をくぐるようにして助か」と。なぜかという、救いにあずかっているからです。先ほどもお話ししたように、罪の赦しをいただいているならば、その人は罪のさばきを恐れながら生きる必要はないのです。ただ先ほどから繰り返しているように、罪の赦しをいただいて、クリスチャンとしての歩みを始めて、イエス様にお会いするその日まであなたが地上にあってどのような信仰者として歩んだのか、どのように生きたのか、その真価が問われると言うのです。価値ある生活をした人と価値ある生活をしなかった人の話です。どちらも救いにあずかっているゆえにこの永遠の祝福はいただくのですが、褒美をもらう人とそうでない人がいるという話です。

だから我々が覚えなければいけないのは、自分はどちらかの人生を生きているのかです。クリスチャンたちはどちらかを生きているのです。本当に価値ある生活をしているクリスチャンとそうでないクリスチャンがいるということです。考えていただきたいのは、このイエス・キリストというとても高価な土台にふさわしい建物をあなたや私が建てているかどうかです。パウロはこのコリントの教会の人たちに対して、ひとりひとりが考えなければいけないのはどんな信仰者としての歩みをしているのかということだと。

3) 滅びの人生を送った人々 16-17節

(1) 警告の理由 16節

そして最後16-17節を見ると、今度は滅びの人生を送った人々の話に移行します。救いにあずかっている者たちの中で神に喜ばれる、神の前に価値ある生き方をしている人とそうでない人を対比した後で、16-17節は滅びの人生を送った人々の話です。「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊が

あなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」、まず「知らないのですか」ということばですが、本当にパウロが言いたいのは「知っているでしょう？」ということばです。あなたたちはこれらのことを知っているでしょうかと。当然この16節の質問に対して彼が期待した答えは「当然知っていますよ、パウロ」でした。パウロがこの16節で、クリスチャンはどういう人なのかということばを二つ説明するのです。

①「神の神殿」 Iコリント6：19、IIコリント6：16

一つはクリスチャンたちのことを「あなたがたは神の神殿」とであると言うのです。この「神殿」ということばは神殿の敷地全体を指すことばと、もう一つは神殿の中でも至聖所と言われる最も聖い場所を指すことばの二つがあります。ここで使われていることばは後者です。神殿の全敷地を話しているのではなく、神殿の中で至聖所と呼ばれる場所を指すことばが使われているのです。少し思い出していただきたいのは、この至聖所というのは大祭司が年に1回神と会見をする場所です。いけにえの血を持って入って行って、そこで神と話したのです。パウロは、今神殿はないけれども、あなたたちが神殿、あなたたちが至聖所なのだ。だから私たちはいつでもこの神と会見できるのです。その当時、大祭司がいけにえの血を持っていかなければいけなかった。ただ違うのは、私たちはいけにえの血ではなくイエス・キリストの血潮によってその場に立つことができるのです。この至聖所というところでは神の栄光が現されたのです。神はあなたや私を通して、そして神を愛する者たちが集まっている教会を通して栄光を現すというのはそういうことです。

②「聖霊の住まい」 ローマ8：9、11

もう一つ彼が言うのは「神の御霊があなたがたに宿って」と。クリスチャンというのは聖霊の住まいなのだと言うのです。この「宿る」ということばは「住む」とか「住居とする」という意味です。聖霊があなたのうちにご自分の住まいとして宿っておられると。ですからクリスチャンとは神の神殿であり、聖霊が内住している者たちだと。パウロがそれを教えて、当然コリントのクリスチャンたちもそのことを知っていた。あなたも知っている。ということは、先ほども見てきたように、全能なる神があなたのうちに宿っているのでしょうか？ということはその力をいただきながら私たちはこの地上で信仰者として成長していくことが可能だということです。私たちは自分の力で神の栄光を現すことはできません。でも我々のうちにおられる全能なる神によって神の栄光を現すことは可能なのです。私たちは自分の力で神に喜ばれる歩みをすることはできない。でも神の力によって、神を喜ばせる歩みができるのです。神様の教えや命令に従うことは可能なのです。その力が与えられている。こんなどうしようもない罪に汚れた私たちを神は赦して受け入れてくださった。そんな私たちを神はキリストに似た者に変えていってください。そのために必要な力はもう既に与えられているのです。こうしてパウロは、コリントの兄弟たちに対してあなたたちがしっかりと据えたイエス・キリストという土台にふさわしい歩みをしていくために必要なものはすべて与えられているではないか、問題はその約束を信じ、そのように生きることを決心して主の助けをいただき続けているかどうかだと。パウロはコリントのクリスチャンたちに対して、あなたたちは神の神殿であり、聖霊なる神があなたたちに住んでおられることを知っているでしょうと強調したのです。

(2) 警告の内容 17節 マタイ13：41、IIテサロニケ1：8、IIペテロ3：7

そしてそのことを話した上で、そんなクリスチャンたちを迫害する救いにあずかっている人々への警告へと進むのです。17節「もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。」と。神の神殿である教会、つまりこの救いにあずかった者たち、信仰者を迫害する、イエス様を信じていない人々への警告です。教会外からも迫害がありました。でもパウロが特に指摘するのは、教会内からの迫害なのです。この後パウロは我々がさばかなければいけないのは外部の人ではなく、内部の人だと教えます。神の働きをしようとする時に、必ずサタンはその中にその働きを邪魔する人々を送り込むのです。クリスチャンのようでありながらそうでない者たちがいるのです。クリスチャンのようでありながら神の敵がいるのです。そういう人々は教会が成長する妨げをなすのです。教会の中にいろいろな分裂をもたらすのです。教会の中にいろいろな不和や争い、分派分裂が存在する。まさにそういう状態にコリント教会があったのです。パウロはそういう働きは神を汚すことだと。なぜならこの信仰者たち、クリスチャンたちというのはまさに神の神殿だからと。そういう人々を「こわすなら」と書いてありました。「こわす」というのは「損なう」、「汚す」、「傷つける」ということです。もしあなたたちがそういうことをするのであれば、あなたたちは「滅ぼされ」と書いてあります。破滅するということです。つまりその人たちが行った、その行いにふさわしい神からの厳しいさばきが下ることを警告したのです。

そしてこう続きます。17節「神の神殿は聖なるものだからです」、この文章の前に実は「それは」という接続詞がついているのです。なぜかという理由を説明するのです。なぜ教会を、主イエス・キリスト

を信じる者たちを迫害する者たちが厳しいさばきを受けるのか——。それは彼らが「聖なるもの」だからです。神の持ち物だと言うのです。その者たちを迫害する彼らに対しては、神様の大変厳しいさばきがあると。何度もそのことを神ご自身が言うておられます。イエス様がマタイ13：41-42でも「人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行なう者たちをみな、御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。」と。「泣いて歯ざしりする」というのはさばきの話です。Ⅱテサロニケ1：8で「そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。」とあります。神を信じる者たちや教会を迫害するのであれば、彼らには神様から大変厳しいさばきがあると。これは私たちが先ほど見てきたさばきではなく、“大きな白い御座のさばき”であって、そのさばきの座に立ってすべての罪人は自分たちがどのような罪を犯したのかが明らかにされて、それにふさわしい永遠の地獄へと至るのです。その“白い御座のさばき”に立って、そこで救いにあずかる人はひとりもいません。そこに立ったひとりひとりの罪人は自分がなぜ地獄にふさわしいのか、そのことを明らかに示されて、永遠の滅びに至ってしまうのです。パウロもⅡペテロ3：7で「今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。」と言っています。必ず神のさばきが下る日が来ると。

きょう私たちがこのみことばを通して、主が教えてくださっていることをいろいろと見てきました。私たちは主のために仕える。皆さんも一生懸命仕えておられる。我々がいつも自分に問いかけなければいけないのはどんな動機でやっているかです。神の関心は、あなたが何をするかではなく、どんな心でしているかです。あなたの心が正しければ、その正しい心は間違いなく正しい行いを生み出して行きます。心が正しくなければ、たとえ正しい行いをしていたとしても長くは続きません。また同時に、私たちが覚えなければいけないのは罪から離れているかどうかです。罪の中を歩いていて神を喜ばせることはできない。そんな歩みは金、銀、宝石をもって家を建てるような歩みではありません。我々に必要なのは、自分の歩みが本当に裁判官である神の前に価値あるものかどうかです。神が喜んでくださっているかどうかです。それとも自己満足に終わるのかどうかです。

感謝なことに、神様はまだこの日を下さった。明日与えられるかどうかは我々にもわかりません。でもこの日、我々はこうして神の前に正しく生きることは可能なのです。明日与えられたらそのように生きていくのです。そうやって私たちはイエス様にお会いする日まで、それを楽しみにしながら歩み続けていくのです。願わくばこのみことばを通してひとりひとりが自分の信仰生活を吟味する機会になることを望みます。そしてもし神の前に改めなければならぬところがあるなら、また神があなたの心に迫ってくださって変えなさいと言われるところが示されたら、素直に神様、私を変えてください。変わりたいたいから変えてくださいと。この残った時間、何とかあなたに喜んでいただく人生を過ごしてあなたにお会いしたいと。そのことを願って、それを助けてくださる神に助けを求めながら、この一日歩いていただきたい。そのことを心からお勧めします。私たちの神は信頼に値するお方です。この方だけが全能なる神です。こんな方とともに生きられる、そんな信仰生活を私たちは神様からいただいた。もっと感謝することです。もっとエンジョイすることです。神とともに生きる人生、それが始まったのです。